学位請求論文要旨

論文題名『法然上人伝法絵』の表現機構と思想信仰

大正大学大学院文学研究科国文学専攻博士後期課程三年
学籍番号：一三〇四〇一六　　氏名：平間　尚子

本論文は、『『法然上人伝法絵』の表現機構と思想信仰」と題し、第四章第十一節からなる考察である。以下、要旨を記してみたい。

第一章では、『伝法絵』の諸本と研究史について論じた。これまでの先行研究をまとめた上で、『伝法絵』において疑問視とされている「作者説」を中心に、まとめてみた。

跋文の署名にある「願主躭空」を「二尊院湛空」とするか否かについての議論の焦点は、主に、次の二点となる。すなわち、第一に署名の字、「躭」が、「湛」ではない点。第二に、署名とともにある年齢表記が歴史的事実と異なる点である。二尊院湛空か否かを判断する時に、この二点をだけをもって判断することは、脆弱だとする三田全信氏、中井真孝氏等の意見に賛同したい。そして、これまでほとんど論じられることのなかった国文学的手法を用いて、『善導寺本』『国華本』における表現に注目し、その文脈を明らかにすることで作者の思想信仰を浮かび上がらせようとしたのが、本論文の第二章、第三章である。

第二章は、『伝法絵』の表現機構と題して、本文・和歌に注目し、その特徴を明らかにした。第一節では、『善導寺本』の出生場面には、庭で「弓矢を射る武士」の姿が描かれている。これは、出産時における魔除け「蟇目・鳴弦」の儀式であることを明らかにした。また、法然上人（以下、敬称を略す）の誕生の日に輝いた「弓張月」は、法然の誕生を示す象徴であり、上巻末尾の和歌二首には、「ゆみはり」の語句を詠み込んだ和歌があることを指摘した。上巻冒頭の「弓を張って、鳴らす」魔除けの絵と、上巻巻末の「弓張月」を詠んだ和歌は、首尾照応する構造となっていることも指摘した。

第二節では、細見美術館所蔵『国華本』「屋島・須磨」の段を取り上げ、原文を翻刻し、通釈を施した。法然の配流場面におけるこの章段には、独自和歌があり、和歌の句頭に「なもあみたふ」を詠み込んだ折句となっており、その表現がもたらす表現効果にも言及した。

第三節では、『『伝法絵』和歌考――王羲之と鳥跡を中心に――」と題して、法然の三七日忌の法要に、「湛空」が王羲之の摺本を奉納し、羲之の名前を詠み込んだ和歌が贈られている点について考察した。和歌に、なぜ「王羲之」の名前を詠むのか調査してみると、『万葉集』歌人による王羲之への尊崇を知り得た。また、『古今和歌集』仮名序に「鳥の跡久しくとどまれ」という一文があり、「文字を尊重することが、和歌の道の繁栄につながる」という意味を持ったこのくだりを、平安歌人が『古今集』仮名序とともに「鳥跡」の語句を重んじていることを確認した。さらに、『源氏物語』「柏木」には、死の瀬戸際にいる柏木が和歌を詠む場面があり、柏木の文字の様子を示す言葉に「鳥跡」の語句が用いられ、この場面が、後世の文学作品に影響を与えていることを知り得た。『善導寺本』の、三七日忌に贈られた和歌と、『源氏物語』「柏木」の場面は、どちらも「死」の前後という状況で、共通し、和歌に「鳥跡」の語句を読んだ『善導寺本』と、文字の様が「鳥跡」のようでありながらも和歌を詠む『源氏物語』の場面とは、共通点が多いといえよう。そして、最終的には、この和歌を法要で捧げることで、湛空が師の法然に、決意表明を示すくだりになっていることを明らかにした。

第四節では、「『善導寺本』における絵解きの形跡――『説経かるかや』を手がかりに――」と題して、『善導寺本』「無品親王静恵」の病気平癒の場面に描かれた童子「石金丸」に着目することで、次の諸点を明らかにした。すなわち、『善導寺本』において「石金丸」は重要な二場面に描かれ、法然に付き従う童子として描かれている。具体的には「無品親王の病気平癒」の場面においては、僧侶に交じり説法を聞く姿が描かれている。「天台座主へ誓文を送る」場面においては、「使者」の役割を担って描かれている。「石金丸」という名前に注目すると、『説経かるかや』や『平家物語』の「石童丸」という名の童子（『平家物語』には「石金丸」も登場する）が想起される。『かるかや』『平家物語』の「石童丸」は、念仏信仰を持ちながら、主人公に最後まで付き随う姿が描かれている。童子が従う、『かるかや』の苅萱道心、『平家物語』の維盛・重衡、『善導寺本』の無品親王静恵といった三者の境遇こそ、異なるものの、「法然に戒を授かり」、「戒律を守る」行動を取る。その主人に付き従い見守る人物に、「石童丸」「石金丸」という名前で共通するという、親和性の高い構図が認められることを指摘した。

第三章は、「『伝法絵』の思想信仰」と題して、第一節では、『善導寺本』に述べられた『隋天台智者大師別伝』（以下、『別伝』と称す）を淵源とする話型「霊山同聴法華」の存在に着目した。法然伝におけるこの話型の意義とは、法然の円頓戒が、叡山における慈覚大師流の正統相伝であることを語るうえで、「霊山同聴法華」における、釈尊と慧思と智顗の師弟関係は、血脈において欠かすことのできない重要な話型であることを指摘した。

第二節では、「『国華本』「此界一人念仏名」考」と題して、『国華本』に記された『浄土五会念仏略法事儀讃』（以下、『法事讃』と称す）の一節に注目すると、この文言によって、円仁帰朝後、叡山を中心に『法事讃』が流布していることがわかる。このくだりは、法然の説法のことばの中で語られることから、『伝法絵』作者は、『法事讃』にも精通した人物であることが認められよう。くわえて、『伝法絵』上巻に「霊山同聴法華」思想、下巻に「此界一人念仏名」の「天台浄土教思想」が記されることから、『伝法絵』上下巻が同一思想で通底していることが認められる。と同時に、そこには、『伝法絵』作者の思想信仰も読み取ることができるのである。

つまり、『善導寺本』（上巻）と『国華本』（下巻）には、「天台浄土教」という思想信仰において親近性が認められ、両本が密接な関係を持つ写本であることが分かった。

第三節では、「『伝法絵』の臨終場面を読む――「如意臨席」を手がかりに――」と題して、『国華本』臨終場面にのみ描かれた「如意を持つ僧侶像」に注目し、この僧が誰であるのかについて考察をくわえた。その結果、『別伝』に、如意を持って、師弟の間で附法が確かめられる「如意臨席」の文言が確認できた。この師弟とは、すなわち慧思と智顗であり、「霊山同聴」につづいて、ここにおいても、『別伝』を援用する姿勢が確認できた。くわえて、「智顗が最晩年に見た夢告」において、①師の南岳大師慧思から浄土往生が確約されていること、②智顗の臨終には、阿弥陀三尊とともに慧思が見送る（見届ける）ことの二点を約束され、智顗が自身の「死の相」を知るのであった。

看過できない点は、「霊山同聴」、「如意臨席」、「臨終の夢告」の三点が『隋天台智者大師別伝』に記述されている点であろう。すなわち、『伝法絵』作者は、『別伝』の慧思と智顗の附法に着目し、それを自ら作った法然伝（『伝法絵』）に援用し、法然の円頓戒の正統性を詞書や「臨終場面の絵」に反映させたのである。

第四節では、『善導寺本』上巻の「清水寺の仏と仁和寺入道法親王が同詠した和歌」をとりあげ、和歌の背景にある思想・信仰に迫ってみた。その思想とは、「観音菩薩＝阿弥陀仏＝大日如来＝法華経」という密教によって醸成された同体思想信仰である。この同体信仰は、古くは、空海の『法華経密号』『法華経開題』にはじまり、『讃岐典侍日記』、『沙石集』、『法華経鷲林拾葉抄』にも認められる。このような和歌を法然伝（『伝法絵』）に収載でき、密教的同体信仰にも精通している人物を考えると、「三密の法勝」「密学第一」と評価され、歌僧としての活躍が認められる二尊院湛空上人の可能性が浮上してくるという結論に至った。

第四章は、「『善導寺本』作者について」と題して、『伝法絵』の作者像に迫った。

第一節では、「『法然上人伝法絵』の和歌と作者――『善導寺本』の表現を手がかりに――」と題して、『善導寺本』上巻にある和歌二首の解釈を行った。一首目は、法然の出家に際して、母が涙を流したことを「秘密灌頂」と表現している点に注目し、解釈を行った。二首目は、鶏の鳴き声「かけろ」を詠んだ和歌で、この用例が古くは、『神楽』にあることを指摘した。くわえて、法然伝諸本に収載された和歌を比較してみると、『善導寺本』には、独自和歌が多くあり、和歌の作者と本文作者が同一人物である可能性が高いことを指摘した。

第二節では、「奈良における湛空の活躍――『法華滅罪寺縁起』と『楢葉和歌集』を手がかりに――」と題して、『法華滅罪寺縁起』に記された、湛空の法華寺の尼僧への授戒について言及した。ここに湛空の授戒の師としての側面が浮かび上がってくるのである。

また、『楢葉和歌集』を調査すると、奈良・京都の僧侶が多く入集しており、そのなかの一人に「聖信法師」の名前が認められた。調査をすすめると、この人物が、正信房（聖信房）湛空である可能性が浮かび上がってきた。

以上が、『法然上人伝法絵』の表現機構と思想信仰についての考察結果である。

最後に、これまでの考察結果から浮かびあがってくる『伝法絵』とは、どのような伝本であるのか、付言しておきたい。

これまでの考察を勘案すると、『伝法絵』の転写本である『善導寺本』『国華本』は、和歌を主要場面に巧みに用いている点と、『別伝』の思想で通底しているという結論が導き出されるだろう。また、二尊院湛空は、自分の有する和歌や台密、浄土教といった幅広い知識を以て、法然滅後二十五年目に、祖師報恩の思いで、多くの人々を、法然（念仏の教え）と「結縁させるため」に、『伝法絵』を作りあげたといえるだろう。そして、そこに描かれた表現機構は、湛空の有する知識（和歌、台密、浄土教）であり、作者のもっている思想信仰を通した、法然上人像を描き出しているといえよう。以上を、現時点での結論としたい。